

「歴史から見た災害に強い国づくり」

中日新聞社 常務取締役編集担当

小出 宣昭

財団法人リバーフロント整備センター 理事長

竹村 公太郎

工学院大学 教授

畑村 洋太郎



小出 宣昭



【小出】 中日新聞の小出でございます。ただ今の畑村さんのお話を聞いて、ちょっと衝撃を受けまして、事例で紹介された、御巢鷹山の大きな航空機の事故や、去年のJR西日本の鉄道事故とか、私たちが取材して新聞報道している記憶にあるものが続々と出てきました。何を取材しておったのだというように、本当の根っこの部分まではとても到達できなかったという事を改めて実感致しました。現在の日本社会では、とてもその部分まではなかなか到達できないのが実情です。非常に印象的だったのは、警察の原因追及というのは要するに刑事責任を追及するそのための根拠としての原因追及で、それで刑事責任の追及ができない不起訴の場合はそのまま情報が公開されないというので、原因が全然わからなくなってしまいう事です。全くそうだと思います、法体系自体がある程度つじつまを合わせられるような、たとえば、業務上過失というのがしょっちゅう刑法にはあるのですが、ルールどおりやっていたら、絶対に事故はおきない。それにも関わらず発生してしまったのは、どこに過失があったのかというのが、基本的なベースであるわけです。でも先生のお話を聞いていて、災害とか事故とかいうものは確率で必ずあるのだと。それで、その前提に立って物を考えるとまた全く違った原因追及というのか、原因究明というのが

出来るんじゃないかと非常に大きなショックを受けていました。ただ今のご講演を聞いて竹村先生はどのように感じられましたか。僕は非常にショックを受けて、しゃべる気もなくなっちゃってしまったんですけど。

竹村 公太郎



【竹村】 先生の話聞いて一番印象深かったのは、中越地震の新幹線の話でして、僕たちは基礎の話をしらなかつたので、新幹線が線路から飛び跳ねて2キロ走っていったわけです。すごいな、新幹線よくやったと。新幹線を自分の仲間のように良い子だ、よくやったというような思いでずっと今まで思っていたのですが、その下にはあの基礎を直した、あるいは補強していたエンジニアたちがいたのだという事に非常に感動を受けました。というのは、自分の話にひっかけてはいけませんが、私は土木屋でして、常に日本語でいうと下部構造であるインフラストラクチャー、上部構造に対して下部構造を担当している人生を送ってきたわけです。その下部構造を人生の自分の生き甲斐としてやっていた人間にとって、JR技術陣の下部構造屋がいて、あの上部構造の新幹線を救ったのだという事を聞いて、非常に感銘を受けたという事がまず1点でございます。

これからいろいろなお話を聞いていきたいのですが、今日のお話は、僕たち人間が起こしてしまう文明の中の事故、という